

って次第にワイルドへのめりこんでいった。

結婚、それから戦争と敗戦。まさに瓦礫の山と化した東京のまっただなかで、わたしの新生は始まる。ワイルド、スウィフト、D・H・ロレンスと、わたしは思想と美意識の遍歴を重ね、1980年このかた、わたしはワイルドに集中して自己の存在を確認しようとしてきた。ワイルドの生き方と死にざま、かれのあの業績などは、もしかしたら過誤と夫敗にすぎないかもしれず、というよりもわたし自身のワイルド理解が、すっかりの外れだったのではなかろうか？ 要するに、わたしはかれに迷わされていた。だが、親鸞は語っている——「たとひ法然上人にすかさされまひらせて念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずさぶらふ。」わたしはワイルドに欺かれて地獄に墮ちようと、いまはいささかの後悔もないのである。

西のワイルド学会ちょっといい話

堀江珠喜

(園田学園女子大学助教授)

昨年11月19日、園田学園女子大学での学会の成功については、未熟な主催者として、皆様方に感謝の意を表したい。また十分な準備期間・好天・地のりの良さのお蔭もあるが、やはりプログラム、特に西村先生の存在の大きさには改めて敬服する。

先生が隣席にいた私のゼミの学生に、「誰の話に期待しますか」と尋ねられたところ、本人とも知らずに「もちろん西村先生です」という答え。「ではどんな先生だと思いますか」「きっと偏屈な人でしょう。すぐ怒ったりして。偉い方のお話は難しいから、また退屈してしまうんじゃないかと思います」先生が壇上に立たれたときの彼女の驚きはいかばかりであったか。ウッソー！ 閉会后、サインを求めて彼女が差し出した本に先生は、「私の横に座った人」と書き、ウィンクをなされたそう。

ワイルド書誌 (1985年3月～1989年)

森泉弘次注釈「The Birthday of the Infanta」『British Short Stories』 三修社

1985年3月1日

石井 敦子「オスカー・ワイルド(断片)——ある唯美主義者の回想——」『麻布大学教養部研究紀要』(麻布大学) 第19号 1986年3月

奥村 三郎「オスカー・ワイルドの『理想の夫』について」『人文研究』 第38巻第2分冊 (大阪市立大学文学部) 1986年12月